

物語隨筆文學研究

山岸德平著作集 Ⅲ

山岸德平著作集Ⅲ

物語隨筆文學研究

有精堂

山岸徳平著作集 Ⅲ

物語随筆文学研究

著者略歴

明治二十六年新潟県西蒲原郡西川町大字曾根に生る。新潟県師範学校、東京高等師範学校、東京帝国大学国文科卒業。東京女子高等師範学校訓導、学習院教授を経て、東京文理科大学・東京教育大学・学習院大学・実践女子大学・中央大学各教授、東京大学大学院講師、実践女子大学学長を歴任。現在東京教育大学名誉教授、実践女子大学名誉教授・文藝博士。
〔主要著書〕「河内本源氏物語研究序説」「懷風藻と日本文化」「校註枕草子」「堤中納言物語評解」「八代集全註」日本古典文学大系「源氏物語」・「五山文学集江戸漢詩集」「源氏物語研究」(共著) など

校印省略

昭和四十七年二月二十日 初版発行

定価 四五〇〇円

著者 山岸 徳平

発行者 山崎 誠
東京都千代田区神田神保町一ノ三九

印刷所 海外印刷株式会社
東京都千代田区富士見一四一十三

発行所 有精堂出版株式会社
東京都千代田区神田神保町一ノ三九

電話東京(二九一)一五二二
三
振替口座 東京四〇六八四番
郵便番号 一〇一

◇落丁・乱丁はおとりかえいたしません。

物語隨筆文學研究 目次

物語の本質……………	一
竹取物語と中国文学……………	四〇
韓詩外伝及び本事詩と伊勢物語……………	四六
物語について——平安時代の物語——……………	五九
源氏物語の諸本の研究……………	八〇
源氏物語に就いて……………	九一
北山の加持……………	一〇三
藤壺の宮……………	一二七
執なる物の師——花宴巻中の読み——……………	一三三
源氏物語研究の初期……………	一三〇
中世における源氏物語研究……………	一八三
源氏物語の国文学史的地位と絵巻及び版画絵巻……………	二三
紫式部の教育理念……………	三三

鎌倉図書館本狭衣物語に就いて	二四一
浜松中納言の事ども	二四四
「蟲愛づる姫君」について	二六八
堤中納言物語のよしなしごと	二六五
堤中納言物語に於ける笑	二九一
しづくに濁る物語の本文	二九四
住吉物語研究	三二一
とはすがたり覚書	三四三
「とはすがたり」に就いて	三五七
「とはすがたり」の思出	三七〇
中世文学文献資料	三七三
枕草子に就いて	三八五
清少納言と斑子女王	四一〇

清少納言の自然描写	四二
清少納言の旅行と見聞	四六
紀行文藝	四六
清少納言絵詞	四三
有芳菴記と奥州塩釜記	四五七
秋山紀行と一九	四七三
「夜明け前」の木曾	四八五
日本女性と文学	五一
所収論文掲載書一覧	五四

物語の本質

物語の本質とは何か。詮じつめて行けばそれは非常に抽象的なものである。而も結局は文学の本質と共通なものになる。その本質となるべき第一の主要素こそは「人の心」だ。紀貫之が古今集の序に「大和歌は人の心を種として……」と言ひ、フェルプス (W. L. Phelps) が「Advance of English Novel」の中にもそれを述べて「human nature に帰着する。それだけは永劫不変だ。詩人も劇作家も小説家も諷刺家も、何れも皆、各自の注意を人間の思想や愛好や憎悪の情に集中する」(Chap. I. Present state of the novel) と言つたのも亦それである。

それに勿論誤りは無からう。然しそれは余りに抽象的・内面的になつてしまふ。こゝでは作者の技巧の加へられた物語と言ふ着物を着こなして居る姿。その姿の儘を眺めて、その本質乃至は特質を見ようと思ふ。この点から進む時に「物語」と言ふ語彙が非常に耳なれたものであり、又屢々使用せられて居るに拘らず、其の意味は、極めて漠然たる觀念をしか吾々に与へるに過ぎない。

そこで先づ物語の語義及び、その現す概念の内包を一瞥しよう。然る後に作家の技巧によつて上品に、又美しく着物を着せられた姿、「物語」といふ姿に就いて其の本質を見て行く事にしよう。

一 物語の語義

「物語」の語は「話すこと」又は「談話」と言ふのが本来の意味であつた。たとへば枕草子にも「つれづれ慰むるもの、物語り……」などと言つて居る、万葉にも「岩橋の近江県の物語せん」(七)と言ふ様な例は少くない。その

文字は、伊呂波字類抄などを見ると語・話・談等を用ゐて居る。かくの如く「物語」即ち話す事であつたから、従つて話す動作と話の内容とが必然的に相關聯して起つて来る。即ち或る内容を言葉によつて表現する事が「物語」であると同時に表現されたものも亦「物語」である。

かゝる意味での「物語」は民族が言語を使用すると共に起つたものである。どんな民族でも、想像力と物語の無いものは無からう。故にその形式はどんなであつたにしても、亦は如何なる事物がそれに附随しても、其の起源は非常に古い物である。

蓋し何れの民族も文化程度の如何に関せず、共通一様に説話本能を有して居る。幾人かの民衆が相集つた時、其処には必ず「物語」が湧く。又物語る事の満足と「物語」による興味の湧き起る事を寧ろ欲求するものである。つまり自己の情緒又は経験の中に魂を溶させなければ、他人の情緒や経験の内部に住む事を求めるものである。さうして発表の形式はどんなであらうとも、かゝる原始的な「物語」は内容が甚だしく単純浅薄であり、形式も亦極めて單一簡潔である。然し如何に浅薄簡潔であつても原始民族はそれによつて不知不識の間に個性の絶對的な展開を遂げる。自己の思想や信念やを拡張する。又民族間の親和を得る様にもなる。かうした方面への一種の衝動に促されて本来の説話本能は又次第に哲學的思索に向つて進展する階梯となり、詩的創造に向つての展開を助長するものだ。

この詩的創造の展開に伴つて——展開の程度に差はあるが——「物語」の形式も内容も原始民族の浅薄、簡潔から次第に文化民族の深厚複雑へと進んで行く。これが「物語」の進歩の漸進的第一階段である。けれどもそれらの「物語」は等しく幼稚な民族心理の反映である。其の中には狩獵 Sports の功名談等日常の出来事が多からうが概してはラング (A. Lang) が「……怪奇的な奇蹟的な事件で一杯になつて居る。恰もシャルル・ベルロールが『まだそれ (Roson) を持たぬ人』——à Ceux qui n'en ont Pas encore.——と言つた通り Roson Proper が欠けて居る。」と言つた如く全く子供らしい物語であつた。さうして其の各々は幾個かの事件か又は事件の結合された一組のものである。後世の神話や、民間説話も其の中には生き／＼として包含されて居る。

従つてそれらの「物語」はデーン・マツキュルロッチ (Dean Macculloch) が *Childhood of fíroon* に「現在の野蠻人や原始民族の思考・実存する習慣等によつて容易に解釈し説明し得る種類の出来事である。」と言つた様な性質のものである。

兎もあれ「物語」はまだ「貴賤老小 口相伝、前言往行而不忘」と古語拾遺に言ふ様に語り伝へる状態にあつた。語り伝へる人は勿論老人などが主であらう。吾々は大和平野あたりに古代の民衆が「物語」をした様子を容易に想像する事が出来る。夕暮、燃え盛る焚き火を囲んで、暖い時ならば戸外に、多くの民衆が老少の差別なく一人の老人を取巻く。老人は白髪の手や鬚を撫でた後「物語」を始める。その柔和な表情の中に眼を美しく輝かす。民衆の中の或者は緑の草の上に寝そべつたり、木に倚りかゝつて居る。さうして紅い火影に照らされながら快活な魅力ある fantastic な「物語」に酔うて眼を細くして聞いて居る。老人の「物語」には又人を酔はす様な快いリズムも伴つて居る。「物語」がその起源に於いて詩と音楽に關係ある事を思はせるのは実に此処に在ると思はせられる。

かうした種類の老人が——それは男でも女でも——世襲的・専門的になつて来たのが語部である。貞觀儀式の大嘗会の条に、語部、美濃八人・丹波二人・丹後二人・但馬七人・因幡三人・出雲四人・淡路二人。伴宿弥一人。佐伯宿弥一人、各引語部十五人……。就位奏古詞」と見えるのはこの世襲的の語部であらう。古詞といふその内容は、今これを知らねるけれども、矢張り「貴賤老少口相伝」へた「物語」であると思ふ。又職業的になつたのは物語詩人 *Minstrel* である。これは日本の古い時代に存在したか否かは不明であるが、後世には琵琶法師がそれに當つて居る。但しかうなつて来ると「物語」の意味は最早や単に「談話」又は「話」と言ふ事と異なる意味に取扱はれる。本居宣長が玉の小櫛に「……物語とは今の世のはなしと言ふ事にて即ち昔話なり……」と言つた種類の昔話も勿論あるが、昔話ならずとも、其の当時、——語る人と同じ時代に起つた事件もそれに含まれる。さうして其の事件は個々の事件か乃至は結合された一組の事件の何れにしても、それらの「物語」には終始一貫した事件の主潮が活発に躍動して進んで行く。聴者も亦事件の筋に引かれて真つしぐらに前進する様な物になつて来る。

此処に至つて「物語」は、内容も形式も共に原始的な単純から、更に一層複雑なものになつてしまつたのである。さうして単に「談話」と言ふ意味であつた「物語」の内容も、従来のように、其の時々の出来事即ち空間的の意味——この語は妥当でないかも知れぬが——のみの物が、更に時間的の意義をも加味して始めて「物語」に昔話も含まれて来る。けれども「物語」の本来の性質たる「話」とか「談話」と言ふ本質的屬性はまだ決して失はれはしなかつた。たとひ声にリズムを有し、時には身振を伴ふ様な「談話」で、稀に眼に訴へられる屬性を有する場合があつたとしても、それは偶発的の事柄で、「物語」は相変らず口から耳へと伝へられて居たのである。

さう言ふ時代、即ち漂ふ声による物語の時代、所謂、漂泊文学 *Floating Lit.* の時代が長く続いて居たならば、物語の内容に伴ふ、語部や物語詩人の情緒のまに／＼、「物語」は時代から時代へと限り無く漂泊して行つたに相違ない。さうして漂泊中には、恰も生命ある者の如く恐らく栄枯盛衰の運を免れる事が出来なかつた事も争はれない。一度花々しく榮えても、時代の淘汰の冷い手によつて衰へ悩みながら細り行く息を引き取つた物もあるべき筈である。かやうな消長があつても「物語」はまだ時間的と空間的の要素を附帶しながら「談話」又は「話」と言ふ本質的屬性を依然として失はなかつた。

然るに本来、立体的時間的であつた「物語」を平面的空間的に写し取る文字が後世に發明された。この文字によつて所謂、固定文学 *Fixed Lit.* の時代になると「物語」の語義は全く変化し又拡張した。勿論「物語」の従来語義は保存されつゝ更に文字でふ符号によつて写し取られた「物語」、これを「物語」と呼ぶ様にまでなつた。但し文字に写し取られた「物語」になつては、語部又は物語詩人が、「物語」に伴つて表した情緒は全然写されない。加ふるに民衆の耳からではなくて眼を通じて聞く事になる。さうして民衆はリズムを伴つた水彩畫的世界からリズムの無い地獄的世界に運ばれて行つた。同時に民衆は「物語」に対する均等な機会を奪はれる。「物語」に接する民衆の数は非常に制限せられてしまふ。さうしてモルトン (R.G. Moulton) の言ふが如く読書階級 (Reading class) と非読書階級 (non-Reading class) の間に越え難い溝を生じて来る。

かう言ふ時代に於いては「物語」の語義も更に變化して従来の「談話」又は「話す」といふ意義は除外される。其の結果、一見した処では、従来の「談話」又は「話す」意味とは全く違つた物、本居翁の言葉を借りて言へば次ぎの様なものになる。

中昔の程、物語と言ひて一くさの文あり。物語とは今の世の話にて即ち昔話なり。日本紀に談と言ふ文字をぞものがたりと訓たるそを書に名づけて作れ事は絵合の巻に物語のいで来はじめの親なる竹取の翁に宇津保の俊蔭を合せてとあれば此竹取や初めなりし……」(玉の小櫛巻一)

かやうに「談話」又は「話す」事実ではなくて、「談話」又は「話」を文字でふ記号によつて写し取つたものを「物語書」又は「物語」と言ふ様になつた。其処には時間的距離を有する昔話もある。又物語作者と同時代の事件もある。これが「物語」の語義の最後の展開である。この最後の展開は平安時代に入つてからであつて、本居翁の言の如く、竹取物語などがその濫觴であらう。

二 物語の語の外延

「物語」の意義はかやうに耳に訴へるものから、目に訴へる物へと轉移し、目に訴へるものを「物語」として取扱ふ様になつた。然し耳に訴へる物は全然消滅し去つたのではない。相変らず口から耳へと漂ふ声として伝へられた。それには民間説話 Volk-tale などになつてまだ残存して居る物が少くない。又「物語」のリズムは音楽の方面へ分離して行つたものもある。

又「物語る」形式を保存しながら文字で記述されて固定文学となつたものとしては平家物語の様なもの——出来た時代は新しい——が存在する。浄瑠璃などもこの性質を多分に保有して居る。

一体日本にはギリシヤなどに見る様な古い叙事詩が残つて居ない。これは非常に残念な事であるが、漂泊文学時代には恐らく存在したものに相違ないと思ふ。只悲しい事には支那の文字を借用して固定文学時代になると、漢字及び

漢文の困難な文章法の苛酷な束縛によつて、叙事詩は破壊されてしまつたものではなからうか。又、文字の使用に伴うて語部も不要になりつゝ次第に忘れられ顧られなくなる。さうして美しい叙事詩は無残な最期を遂げたものではあるまいかと思ふ。勿論これが全部の原因とは考へないが、かゝる理由も確かに日本の叙事詩破壊——叙事詩の存在しない一因であらう。かくして中世に平家物語の様なもののみが纔に存するのであらう。

以上は耳に訴へた「物語」の末路であるが、然らば目に訴へられた物語の外延は如何であらうか。次ぎにそれを見つめよう。

世界何れの国も共通である様に「物語」の模倣は古くから存在した事であるが、文藝評論 Literary Criticism の起つたのはまだ新しい。テーヌ (Taine) 以前には近代的の評論——文学の哲学とも称せられる文藝評論は殆どなかつた。アリストートル (Aristotle) の詩学 (Poetica) の如きは詩の方面の古いものに過ぎぬ。

日本も亦、漢や唐の詩論・文体論等を模倣したとは言へ、文鏡秘府論の様な物も弘法大師によつて作られた。又彼の詩論を直訳した様な歌論も出た。然しこれらは一樣に Rhetoric であつて純粹な Criticism では無い。加ふるに物語には殆ど適用されなかつた。鎌倉初期頃に現れたと思はれる無名草子が纔に物語批判の先鞭を附けた。其の批評は主観的であり感情的であつた。自己の感情を尺度として物語中の人物を批判した。人物に対すると同一尺度を以て物語に於ける描写方面を批判した。歌論の刺戟もあつたか知らぬが、當時に在つては蓋し出色の物である。たとひ「物語」全体を一個体として鋭利な評論のメスを振ふに到らなかつたとは言へ、若しこれを承襲する者があつたならば、日本に於いては物語が一層洗練され各方面に進歩展開したかも知れない。尤も文学衰へて文学論起るとも言ふが Criticism の行はれない処には物語を刺戟して進歩展開せしめる機会は全く与へられぬ。殊に平安時代の後半から根ざした力強いクラシズムの潮流は物語の模倣のみを多くした。此の時無名草子が恰も彗星の様に独り忽然と現れたのみで終つたのは非常に残念である。

兎に角我が国の物語は批判なしに刺戟なしに刺戟によつて進んで行つた。又「物語」の語の示す概念の外延も極め

て漠然たるものであつた。栄華物語や秋津島物語は歴史である。和泉式部日記の和泉式部物語・高光日記の多武峯少将物語・在五中将日記の伊勢物語の如きに至つては、日記も物語も厳密に区別しなかつた時代の事情を推察する事が出来る。

草子と言ふ語も亦鎌倉時代以後は「物語」と同様に使用せられた。岩屋草子の岩屋物語、福富草子の福富長者物語は論ずる迄もないが、大仏供養物語でも俵藤太物語でも同じく皆お伽草子と世人は呼んで居る。されば小町草子・唐糸草子・蛤の草子・文正草子・横笛草子・長谷雄草子などは均しく皆草子と言ふけれども亦物語である。即ちお伽草子は又お伽物語と称すべき性質のものである。蓋し草子と言ふは草紙のまゝの外形を以て存在した、からの名称で、本来は即ち「物語」たる性質の物である。

又「物語」は今日の所謂、小説と言ふ語と甚だ共通点が多い。小説といふ概念は、寧ろ物語の中に全然包含せらるべきものである。その理由を明かにする前に先づ小説の語義を聊か明かにしよう。

小説と言ふ字面は漢書藝文志第十七に「小説家者流・蓋出於稗官・街談・巷語・道聽塗說者之所造也……」とあるのが文献に見えた最初である。即ち王者は閭巷の風俗談話等を知らうとして稗官を置く、稗官は其れ等を聴いて説いたり、記したりする。稗史の語の内容もこれによつて自ら釈明せられる、又、張衡が西京の賦に「小説九百本自虞初・漢書藝文志載……」とある。藝文志には伊尹子二十七編以下虞初周說九百四十三編等すべて十五家、千三百八十編をあげて居る然しこれらに記された小説の語義は、現代人が口にする小説の謂とは大いに趣を異にして居る。巷談も街説もあるが、目ざす所は經典に本づかぬ雑説を短かく記するに在つたらしい。それらの記録を、經典に述べてある大道に比して、小道であり又些細な事件でもあるが故に、その小道を小説と称したのであつた。つまり道聽塗説の切談から諸子雑家の流を言つたのである。通俗篇に所謂「非若今之穢誕言也」と言つた通り今日言ふ小説の謂とは違つて居る。唐には伝奇的の物はあるが短い物ばかりである。今日言ふ小説と同じ意——即ち「穢誕言」と言ふ如き意味に用ゐたのは宋以後からであつた。宋に譚詞小説と言ふのがある。譚の音は五因却、弄言也でこの場合の小説の義

は今日吾々の小説と云ふ意と略ぼ同じく使用せられて居る。然し支那にはかう言ふ意味で「小説」の文字を使用するのは多くない様である。晋唐小説や五朝小説の如き物はあるが多くは神仙・怪志・夷堅・齊諧等の語によつて「物語」を纏め且つ分別して居る。例せば酒吞童子伝説の根源であるときで指摘せられて居る白猿伝は立派な Romance である。これは説郭の第百十三竜威秘書の第四集・艶異編卷十一の上、晋唐小説等に載つて居るがこの種の物を集録しても艶異と言ひ、秘書と言ふ様な物に総括して居る。(白猿伝と酒吞童子の事蹟との關係を指摘した者で、貝原益軒の扶桑記勝卷六には「相似たり」と言ひ、釈海国の桜陰膚談の上巻には「……童子の事は白猿伝に拠りしものならん」と言つて居る。歐陽紇の妻が鬼にさらはれて鬼退治するのは頼光の事蹟と酷似して居る事は確か。)

次ぎに又我國の文献を見ると関根正直の小説史稿に見える通り、釈日本紀に載せた弘仁私記の序に異端・小説怪力乱神云云」と引用した文中に小説の語が存在する。これが恐らく最初であらう。けれどもこの小説の語義は前記の小道の意義と類似したもので現代人の所謂、小説とは聊か異なつて居る。我國で小説の字面を現代人の如く使用した最初は徳川時代であると思ふ。巷談や道聴塗説を記して稗史と言ひ、又小説と称したのは江戸の方から始まつた事で蜀山人や馬琴などからでは無からうか。蜀山人は京伝の骨董集の上に「醒々老人、積年所著小説、九百、不讓虞初、世態常寶、無所不通、稗史野乘、無所不窺」と言つて居る。若しこれが現代人と同じ意味の義に小説を解釈したものとすれば、比較的新しい物であると知られる。

其の後明治に入つてからは、幸田露伴の二日物語などもあるが、物語と云ふ名称は殆ど用ゐられなくなつて小説の語が「物語」の地位に替つて来た。但し物語といふ時よりも小説と言へば概念の外延は狭小である事は既に述べた。以上述べて来た事に拠つて、目に訴へられて来た——耳に訴へて来たものに對して——物語の外延を次ぎの如く列挙する事が出来る。

a 歌物語、抒情詩又は叙事詩から写実の物語 Novel への過渡期の存在物たるの感がある。従つて次第に後に出来た物程、説話的であり又写実の物語的色彩が表れて居る。

b 伝奇物語 Romance 源氏物語以前にはこの色彩の顕著な物が多い、竹取などの如くに。

c 写実物語 Novel 源氏物語が其の模式的の作物である。

d 説話物語 Oratory 我が国の説話物語には仏教文学と密接な關係を以て居るものが少くない。

e 歴史の物語 history 作者は何れも或目的を以て記述した。平安時代の物は或点に於いて個人の伝記的色彩も顕著である。

f 伝記の物語 biography これは物語と言ふ迄に展進しなかつた。

右の中 a——d までと、e f とは自ら異なるべき性質の物であらねばならぬ。何となれば e f は實在によつて制限さるべき性質のものであり a——d は實在による制限と言ふ規範が全く附加されて居ないけれども平安時代——これから以後も主として平安時代に局限して述べようと思ふが——平安時代の歴史物語はたとひ歴史であつても決して冷たい文献學的歴史では無い。詩的歴史とも言ふべき物である。詩的歴史、それに就いてクロチエ (Benedetto Croce) はかう言つて居る。

「……詩的歴史の叙述の多くの実例は敬愛された人物に就いての感激に充ちた伝説・憎悪された人物に就いての諷刺に埋つた伝記などに於いて見られる。其の他著者自身の属した又は同情を寄せる。

国民の成功を讃美し、其の失敗を嘆惜し、其の敵対国民、彼れ自身の敵の上に憎惡の焰を投げつける愛國的歴史……此等は何れもこの例である。」(羽仁五郎訳、歴史叙述の理論及び歴史)

クロチエに従へばこれは「新たなる誤れる歴史形式」であるにもせよ、平安時代の歴史の物語は、写実の物語に刺戟せられて生れたものである。故に刺戟者たる物語の性質を多分に保有して居る点は其の一特色であらねばならぬ。

此処に興味のあるのは d 即ち我が国の説話物語である。それは前記 e f の性質を多分に有する者もあり、又全然 e f の要素のみから成立して居る物も存在する点である。従つて今昔物語の如きものは d でありながら a——c 及び、e・f をも含む様な性質になつて居る。蓋し説話の物語の發展上からはこれが当然の結果であらう。

今、便宜上 a——c を現代人の使用する「小説」と言ふ意味に総括する事としよう。

さて以上述べた所に拠つて「物語」といふ語の示す概念の外延を明かにした。次ぎには其の本質——特色特質に關して述べて行く。

三 物語の特質——要素

物語、それが何であらうとも——情緒に重きを置かうとも、事件又は人間に重きを置かうとも——其の何れに力点を置いた物語でも、其の核心をなすものは人間である。

然し人間の事、それは内外共に極めて複雑である。人間を取巻いて色々の事件が同時に、連続的にも亦偶然的にも計畫的にも絶えず起つて来る、恰も大海の渦巻の様だ。それを悉く記述する事は何人にも到底出来ない。それらの大渦の中から物語の材料としては僅に或る一事件が探求されるに過ぎない。故に「物語」は人生全体の絵畫では無い。人間生活上の或る一面若しくは辛うじて其の一点である。然したとひ或る一点乃至は一面にもせよ、其の核心をなすものは人間である以上、吾々は其処に物語の特質を探求しなければならぬ。

この場合に先づ人間を両方面から觀察する事が便利である。即ち一面は性格であり、他面は性格と連關して起る人間の行為である。性格は古い時代の「物語」には殆ど無視されて居た。人物は單に存在を示されるだけで、性格の展開は無い。それは竹取物語などに就いて見れば明かであらう。人物は外面的に指示せられて居る。然し源氏物語になると全く内面的に性格も心理も取扱はれて居る。外面的から内面的へ、客觀的から主觀的への道を取るのには「物語」の展開して行く普通の道程である。近代の作物は性格の發展と性格相互の關係を深く考察する様になつて居る。個性・人格・心理等の成長と複雑との研究が、性格研究の事実となつて來た。たとひ古い時代の「物語」に性格は等閑視されたとは言へ、これらはかくの如く「物語」に重要な本質的要素である。個性又は人格心理——一般に言へば人物の義務は社会に対して置かれる。又社会の義務は個性又は人格・心理上に向けられる。即ち近代の「物語」は性格